

チベットと日本の 架け橋を目指して

公益財団法人 守屋留學生交流協会 第43回奨学生
ジャムヤン 加羊



民族衣装着用

◆略歴◆

- 1992年 中国青海省海南チベット族自治州生まれ
- 2012年 海南州第一民族高級中学 卒業
- 2013年 日本へ留学 (東京平田日本語学院)
- 2015年 聖学院大学 人文学部 入学
- 2021年 聖学院大学大学院文化総合学研究所博士前期課程 修了
- 2022年 東京外国語大学大学院総合国際学研究所博士後期課程 入学

多くはチベット自治区のみに住んでいると思われ
ますが、その東にある青海省、四川省、雲南省、
甘肅省の4つの省にも実際には多く居住していま
す。中国の2020年の統計^{※1}によると、チベッ
ト自治区には約313万人、4つの省には合わせ
て約378万人、中国全体では約706万人のチ
ベット族が住んでいます。

◆チベットの伝統的生活、そして現在の課題

「世界の屋根」とも称されるチベット高原は、
平均標高4000mを超えます。この過酷な高地
に生きる人々の生活は、自然環境に大きく左右さ
れてきました。高地では主に遊牧、低地では農耕
が営まれ、その中間には農牧を組み合わせた混
合形態の生活が存在します。チベットでは、約
8800年前から野生動物を家畜化したといわれ、
遊牧が生活の基盤となってきました。1990年
代まで放牧地は共有とされ、季節ごとにヤクやヒ
ツジなどの家畜と共に遊牧生活を送り、冬になら
ずと人はレンガの家に住み、家畜は常に遊牧地を移
動していました。

◆はじめに◆
私の名前は加羊ジャムヤンといいます。チベット族では、
かつて貴族や大商人だけが姓を持つていましたが、
近代では廃止され、名前だけ用います。名前には
その子の特性や家族の願望が込められており、私
の名は、あるお坊さんによって命名されました。
「ジャム」は優しさを、「ヤン」はメロディを意味
しています。
中国西部のチベット高原の中心に、チベット自
治区があります。一般に「チベット族」というと、

生活は家畜と密接に結びついており、家畜の毛
はテントや敷物、衣料品、乳は乳製品、肉や内臓
は食糧として重要です。乾燥させた家畜の糞は、

燃料として高地の
寒さをしのぐため
に欠かせません。

こうした環境の
中で、チベットで
は土着のボン教と

仏教の共存が生まれました。仏教の教えである輪
廻転生、慈悲、徳を積むこと、そして「諸法無我」
(すべてのものは無我であるという教え)は、チ
ベットの文化に深く根付いています。日常生活で
は、寺院や聖山、聖なる川へ巡礼し、調和と共存
を祈ることが重要な習慣であり、その際行われる
五体投地は、額、両ひじ、両ひざを地面に着ける
礼拝で、深い敬意と信仰を表しています。
チベットに特有な葬儀方法として知られている
ものに鳥葬があります。命を支えるために多くの
生物を犠牲にしている人間が、死後は自らの遺体
を他の生物に与えるという考えに基づいています。
ハゲワシに遺体を捧げるこの儀式は、自然との調
和と輪廻の教えを象徴しています。

自然と共に生きてきたチベットですが、今、さ
まざまな課題に直面しています。気候変動や土地
の荒廃は高原の生態系に影響を及ぼし、一部の地
域では過放牧によって放牧地の質も低下していま



※1 『中国統計年鑑2021』ほか



チベット高原でのヤクの放牧の様子。ヤクの乳量は少ないが、たんばく質を多く含む。バターやチーズに加工される。(筆者撮影)

す。また、国の政策により、移動性に富んだ暮らしは暖季と寒季の2季輪換で放牧する半定住化からしだいに定住化へと変化し、都市化も進み、伝統的な生活様式が失われつつあります。

◆チベットの教育と留学の夢◆

チベットの教育には、伝統的な寺院教育と中国政府による公式の学校教育制度^{※2}があります。寺院教育は、信者からの寄付などで運営されています。初級（6歳）から中級、上級に分かれており、教養や哲学などの学習だけでなく、言語や文化の伝承の場として重要です。僧侶は地域社会で相談役やリーダーとして活動し、地域社会の結束を促す役割も担っています。

一方、公式の学校教育では、チベット語が第一言語であり、小中高一貫して中国語以外の科目はチベット語で教えられていましたが、近年、中国語が第一言語となり、チベット語の科目以外はすべて中国語で教えられるように変更されました。2024年からは、民族大学のチベット語学科においても、学位論文は中国語で書くように決定されました。

私は1992年2月に、青海省の古き村・ポンゴルに生まれ、黄河が悠々と流れ、広大な草原と山々に囲まれて起伏が多く、牧

畜、農耕、農牧複合が行われており、チベット高原の生活様式の典型的な地域といえます。私の家は牧畜業を営んでおり、幼い頃から家畜を追いかけて育ちました。8歳から公式の寄宿小学校に通い、中学校に進んだ私の視野は広がり、異文化コミュニケーションに魅了され、英語は私の世界を豊かにしてくれました。いつしか、異国に行くことが私の夢となりました。

2012年に高校を卒業したある日、放牧中にラジオを聴いていると、青海民族大学が「日本語強化コース」というプロジェクトを設け、約1年間の学習を通じて日本語能力試験N4に合格すれば留学できるという案内が、夏の風に乗って耳に飛び込んできました。すぐに応募し、その年の9月から強化コースに参加、約半年で合格し、翌年、ついに留学の夢が現実のものとなったのです。

◆日本での生活と研究◆

2013年12月、日本での生活が始まりました。早く日本での生活に溶け込めるよう学校で多くの日本人学生と接し、運送業、コンビニの店員などの仕事も経験し、大学に入学した15年からは整体マッサージのアルバイトに専念し、今も続けています。長く続けてこられたのは、店長やスタッフのみなさんと温かい人間関係を築くことができました。特に、店長はチベット文化に深い関心を寄せ、住まいを提供してくださるなど親切にしてください、私は日本の文化に少しずつ慣れていくことができました。

そのような中で、大学院への進学の道を模索し始めました。自らが探究したい領域を探り、自分

の得意な分野は何かと自分に問いかけ続け、幼い日々から共に歩んできた家畜と自然環境の関連性に研究対象を定めました。チベットの自然の中に住む人々が野生動物を家畜化し、生業を築いてきた背後には、長い歳月をかけて蓄積された知恵の伝承があると気づいたからです。それは、学術的には「伝統的生態学的知識(TEK)」にあたるもので、博士前期・後期を通じて、異国日本のに立ち、故郷を振り返りながら研究しています。

チベット高原では、遊牧民は長年にわたり季節に適した営地を構え、4種の家畜(ヤク、ウマ、ヒツジ、ヤギ)のバランスを意識した放牧が行われ、家畜から生まれた5大資源(肉、乳、皮、糞、毛)を生活の中で使いこなし、家畜数と牧草地との適切な関係を維持してきました。現在、高地草原に住む牧畜民と生業を変えて移住地に住む生態移民、伝統的な生態学的知識を実践する環境保護団体に焦点を当て、調査を行い、彼らを通して伝統的な生態学的知識の変容を解明し、その有効性を再評価することを目的に、博士後期の論文を仕上げているところです。

私は、中国の公式の学校教育を受け、休暇中には地元のチベット寺院で学び、大学は博士後期課程まで日本で過ごしました。複数のシステムと価値観の下で教育を受ける機会に恵まれ、それぞれの社会に広く理解を持つことができました。日本で博士号を得た後は、研究職に就き、生態人類学研究の最前線で研究を進めながら、学術交流や共同研究に積極的に参加し、社会との協働や異文化間の相互理解の強化に貢献できる、チベットと日本の架け橋となる研究者になることが目標です。

※2 かつては子どもが寺院教育と公式の学校教育のいずれかを選べたが、近年は寺院教育を希望した場合、出家儀礼後に公式の学校教育(義務教育9年間)を経てから本格的に寺院での修行、勉学に入るかたちに変化している。